社会・家族の変化と子どもの社会性発達

鶴　宏史・安藤　忠

要旨：近年、保育所や幼稚園において子どもの社会性発達の問題が浮かび上がっている。本論文では、社会性の概念、その発達を阻害する要因を挙げ、社会性発達にとって保育所の果たす意義と今後の課題を提示することを目的とする。社会性発達の定義については一致した見解はないが、自己の確立と対人関係（人間関係）に関する諸特性ということができ、また社会的変容の影響を受けながら世代から世代へ、社会集団から社会集団に受け継がれる特質をも有する。さらに、社会・経済状況の変化は地域社会や家族にも大きな影響し、子どもを取り巻く人間関係にネガティブな影響を与え、これが子どもの社会性発達に影響を与える。このような状況において、多くの子どもが家族を離れて初めての集団生活を送る保育所の役割は極めて重要になってきている。子どもたちが集団生活する最も重要なメリットの1つは、他の子どもとの相互作用を通して成長・発達していくことにある。それを可能とするためには、①子どもの育ちをミクロからマクロの環境の相互作用から捉え、援助を行うこと、②「環境による保育」を通して人間関係を意識して育むことが必要とされる。

キーワード：社会性発達　生態学的視点　環境　保育所

1. 子どもの社会性発達の危機

子どもの育ちの危機が指摘されるようになってから久しい。身体の育ちに関しては、基礎体力の低下[(1)(2)]、自律神経系の異常[(3)]、脳の発育不全[(4)]が指摘されている。また、近年では、いわゆる「気になる子ども」「キレル子ども」「自己チュー児」が増えてきた。これらは自分の感情がコントロールできない、相手の感情を読み取れない、自分の行動が相手にどのような影響を与えるのか推測できないなどといった、他者とのコミュニケーションにつまずきを持つ場合が多い[(5)]。これらはいわゆる社会性発達の問題と指摘され、「少子化対策プラスワン」「子ども・子育て応援プラン」などの政策レベルでも取り上げられるようになってきている。

このような傾向は、保育所や幼稚園でも報告され、どのようにして保育を進めていけばよいのかが大きな問題となってきている。例えば、本郷らの保育所を対象とした調査[(6)]によれば、保育所における「気になる子ども」の具体的な行動として、①対人的トラブル、②落ち着きのなさ、③状況への順応性の低さ、④ルール違反が挙げられた。

また、平澤らが保育所を対象とした調査[(7)]では、「困った行動・気になる子ども」の特徴として、①集団活動に関する問題、②ことばに関する問題、③動きに関する問題、④興奮・かんしゃく・情緒不安、⑤指示に従わないが顕著で、そのような行動が生じやすい保育活動として、①クラス活動、②友達とのかかわりなどが明らかとなり、結果として保育所における「気になる・困った行動」として、集団や対人関係に関する複数の行動とまとめている。

本論文では、社会性――特に乳幼児期における社会性――の概念、そしてその発達を阻害すると考えられる要因を挙げ、社会性発達にとって保育所の果たす意義と今後の課題について述べていく。

2. 社会性とは

そもそも、社会性とは何を指すのだろうか。実は社会性についての定義は研究者の間でも一致したものがない。遠藤[8]は、社会性が“sociality”（社会生活性・群居性）、“sociability”（社交性）、“social skill”（社会的スキル）、“prosocial behavior”（向社会的行動）、“empathy”（共感）“sympathy”（同情）というように多義的に用いられ、社会性という用語の多様さを指摘する。その上で、「子どもが発達過程の中で備えるべき、あくまでも『社会』というものに限定的に関わる性質や能力」[9]と定義している。ここでいう社会とは、家族、学級から場合によっては国家までも含む人が共同生活を営む母集団を意味し、さらに、社会性の構成要素として、①特定集団を維持するための基本的特質と集団そのものやそこでの仕組み・制度・規則に関する知識や態度、および②集団成立の基本要素である人と人との関係性を挙げている[10]。

また、繁多によれば、最広義の定義としては、「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性」[11]をいい、この場合、例えば、歯をみがくことができるようになったことも社会性に含めるとされる。最も狭い意味としては、「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」[12]を指すと指摘する。そして自らは、「個人が自己を確立しつつ、人間社会の中でよりよく適応的に生きていく上での諸条件」[13]と定義する。

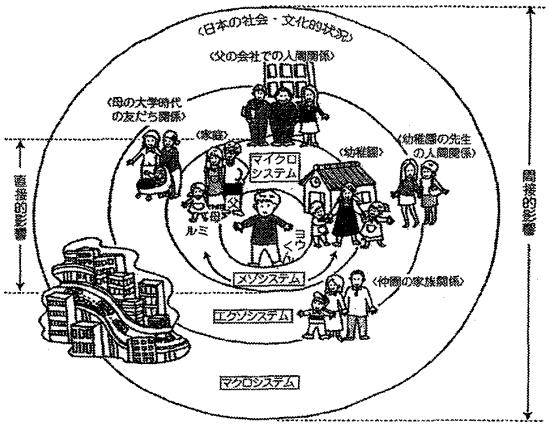
同じような定義として、松永は、「人が自分を確立しつつ、人間関係を形成したり、社会の規範や行動様式などを身につけるなど、その個人が生活する社会において、互いに、円滑かつ適応的に生きていく上で必要な諸特性」[14]とし、その特性を①自己形成の要素（自他への信頼感および有能感、自己制御能力など）と、②他者を捉え、関わるための要素（他者理解能力、役割取得能力、他者への共感性や思いやり、コミュニケーションスキル、社会的問題解決能力）に分けている[15]。

このように見ていくならば、社会性は、自己の確立および、対人関係（人間関係）に関する諸特性ということができる。そして社会性は、出生からおおよそ成人になるまで（十代後半まで）に育まれ、子どもが成長するそれぞれの年齢で、家庭、地域、幼稚園・保育所、学校など、様々な場での人間関係と社会的な経験を通じて、発達するのであり、個人差も大きく、社会的変容の影響を受けながら世代から世代へ、社会集団から社会集団に受け継がれるものという特質を持つ[16]。

このように社会性は我々が社会で生活する上で不可欠なものであるが、しかしながら、次節から述べる子どもを取り巻く環境の変化は、子どもの社会性を育む機会を奪い、本来であれば自然と身につくものが――その多くは社会生活を送る上での基礎をなすものだが――、大人が積極的に教えない限り身に付かなくなってしまったのである。

3. 子どもを捉える視点

社会性発達の問題に限ったことではないが、子どもの問題を考える際、その要因を限定的に子どもやその家族（特に養育者）の中に見出そうとする傾向がある。このような考え方もある程度有用ではあるが、しかし、子どもは多様な環境との相互作用の中で様々な経験をし、影響を受けている。そのため、子



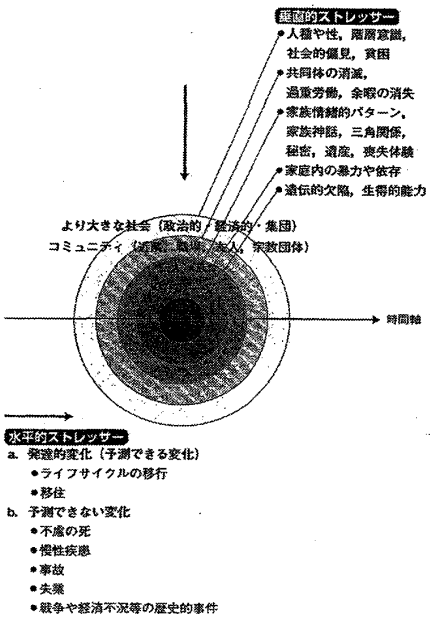
出所：岡本依子・菅野幸恵・塚田－城みちる『エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学－関係のなかでそだつ子どもたち－』新曜社、2004年、19頁。

図1　ヨウくんの生活世界

どもの行動・情緒などに関しては、子どもと環境との相互作用の中で問題を捉え、解決を図る必要がある。

子どもの発達をこのような多様な環境との相互作用を考える視点として、Bronfenbrenner [17] の考え方は示唆に富む。彼は生態学的視点から子どもを取り巻く環境について、マイクロ（ミクロ）・メゾ・エクソ・マクロ4つのシステムに構造化しており、岡本ら [18] は具体的に以下のように説明している。

ヨウくんはカトウさんの家の長男で、会社員の父と専業主婦の母、2歳年下の妹ルミちゃんと、東京近郊の典型的なベットタウンで暮らしている。ヨウくんは現在5歳で、S幼稚園に通っている。ヨウくんの生活（そして発達）に直接影響を当てるのは、彼をとりまく人間関係、つまり家庭での両親や

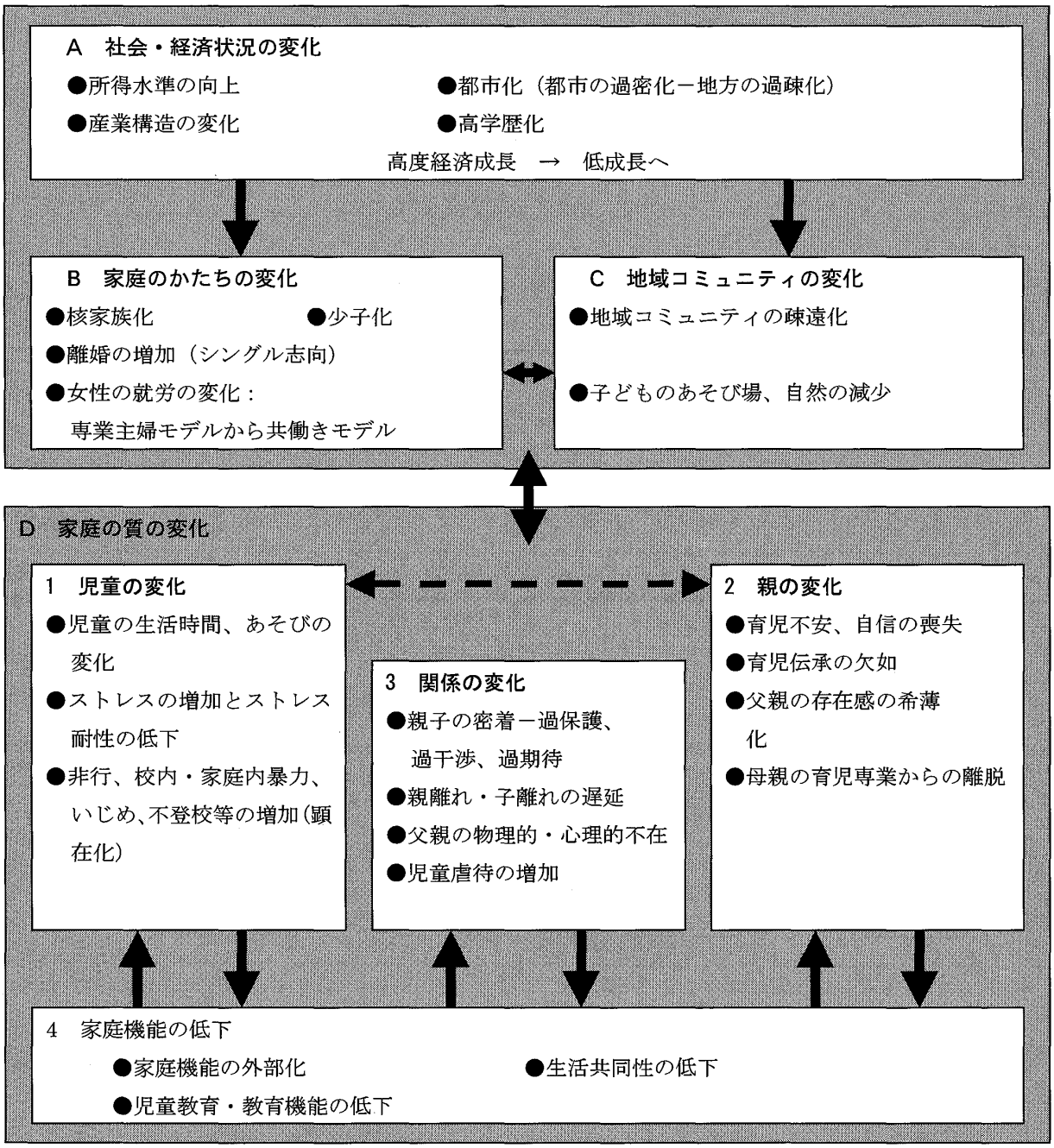


出所：平木典子・中釜洋子『家族の心理－家族への理解を深めるために－』サイエンス社、2006年、31頁。

注：原典は、注（21）の文献である。

図2　家族にふりかかるストレス

妹との関係と、幼稚園での担任教諭や友達との関係である（マイクロ（＝微小）システム）。そしてそれぞれの人間関係は、互いに影響しあっている。たとえば夫婦関係は親子関係にも影響するし、そのことが幼稚園での友達関係にも影響する（メゾ（＝中間）システム）。また、父親の会社の人間関係や母親の友だち関係は、ヨウくんが直接参加するわけではないが、間接的に影響を与えている（エクソ（＝外部）システム）。さらに、日本の社会・文化・経済状況（マクロ（＝巨大）システムも、ヨウくんの発



出所：柏女霊峰『次世代育成支援と保育－子育ち・子育ての応援団になろう－』（全国社会福祉協議会、2005年、24頁）を加筆修正。

図3　児童・家庭に関する諸状況の整理

達にやはり間接的に影響している。さらにヨウくんの成長とともに、ヨウくんをとりまくこれらのシステムは増え、いっそう複雑なシステムのなかで暮らしていくこととなる。

このように生態学的視点は、子どもを取り巻く環境のそれぞれが相互に作用し合っていることを示してくれる。しかしこれらの環境システムは固定したものではなく、子どもの発達に伴って変動する。そのため、のちに彼はこの4つのシステムに時間軸を示すクロノシステムを加えた。これは、時間や次元に関するもので、子どもの発達過程で遭遇する身近な変化から、歴史的出来事や社会的状況を含む[19][20]。

同様の視点から、CaterとMcGoldrick[21]は個人と家族にかかるストレスを**図2**のように図式化した。また、Mussen[22]は、子どもの発達に影響を与える要因として、①遺伝的に決定された生物学的要因、②非遺伝的な生物学的要因、③子どもの過去における学習、④直接の社会的・心理的影響、⑤その中で子どもが育つ総体的な社会的・文化的な環境を挙げている。このような視点を踏まえて、以下、子どもを取り巻く環境について触れたい。

4. 社会環境と子ども

子どもにとって家族（親）とその中で育つことの意味は限りなく大きいが、子どものネガティブな変化を親の責任としてのみ追求することはできない。なぜならば、前述したように、親もまた子ども同様に社会という複雑な環境との相互作用の中で生活し、そして影響を受けているためである。

柏女[23]は、現代の子どもや家族を取り巻く環境を**図3**のように様々なレベルにおける児童・家庭に関する諸状況を整理している。

社会・経済状況の変化として、産業構造の変化、都市化、高学歴化、所得水準の向上と、他方で所得格差の増大などが挙げられる。これらの変化は、地域社会、さらに家族に影響を与えた。地域社会の変化でいうと、都市化によって近隣とのつながりが希薄化し、また、近所で手ごろな遊び場が減少し、子ども同士で戸外で遊べる環境が減少し、屋内でのテレビゲームや、また、幼少期からの塾通いが増加している。さらに、交通事故や犯罪に巻き込まれる危険性も増大している。

家族の変化では、核家族化・小家族化が進展し、家庭での人間関係が単純になり、家庭生活を送る中で子どもが人間関係を学ぶ機会が少なくなった。さらに近隣関係の希薄化によって、子育ての支援が得にくく、結果として、家族システム・レベルでは、仕事と子育ての両立の困難さと、育児家庭の孤立化が挙げられる[24]。詳細については次節で触れるが、このような変化が、子どもの成長・発達や家族のあり方、親子関係に影響を与えている。

5. 子どもと家族の関係を阻害するもの

(1) 子どもと家族

子どもは多様な環境の中で様々な経験をし、成長していくが、ほとんどの子どもにとって最も身近な環境は養育者である親や家族である。子どもはまず家族の中で生まれ育ち、親から無条件に受け入れられ、また、基本的欲求を満たしてもらい、親に対する基本的信頼感を獲得する。この親子関係における信頼関係が親子関係の基盤を形成する。子どもと親の関係が信頼関係に発展するためには、親が子どもの要求を敏感に捉え、子どもの要求に対応することが重要で、子どもの泣きなどのサインを捉える応答性が求められる。

さらにこのような信頼関係を基盤にして、基本的な生活習慣や社会性を身に付けていく。しかし、そのような親と子の相互作用を

困難にし、親子関係形成や子どもの発達を阻害する要因がいくつか挙げられる。マクロレベルでは前節で述べた社会やコミュニティの変化が影響しているが、楠は対人関係上における「気になる子ども」の直接的な要因を、軽度発達障害と、児童虐待および不適切な養育に求めている[25]。

(2) 育てにくさと障害

気になる子どもについては、出生時からの育てにくさが指摘されている。具体的には、①周りからの働きかけや刺激を受け止める力が弱い、②周りからの働きかけに応える力が弱く、また、その方法（表現）に乏しい、③周りに働きかける力が弱く、また、その方法（表現）に乏しいことが挙げられている[26]。そのことが親－子ども間の応答性の齟齬を生じさせ、環境からの適切な刺激を受けられず、発達に何らかの影響を与えることが考えられる。

このような育てにくさの要因の１つとして、子どもが何らかの障害を持っていることが挙げられている。前述の平澤らの調査[27]によれば、困った行動・気になる行動を示す子どもの発達障害（知的障害、自閉症、ADHD、LD）を有する子どもが約25％を占めており、また、乳幼児期における知的障害以外の発達障害の診断の困難さを指摘されていることから、潜在的な数の多さも示唆されている。

表1　虐待を受けた子どもに見られる症状

身体面	行動面	精神・神経面
1）低身長・低体重・成長障害	1）過食・盗食・異食・食欲不振	1）運動発達の遅れ
2）皮膚外傷	2）便尿失禁	2）情緒発達の遅れ
3）骨折・脱臼・骨端破壊	3）常同行動	3）言語発達の遅れ
4）火傷	4）自傷行為	4）抑うつ
5）頭部外傷	5）緘黙	5）不眠
6）内臓損傷	6）虚言	6）過敏
7）脊髄損傷・麻痺	7）盗み・万引き	7）体が硬い
8）網膜剥離などの眼症状	8）家出徘徊	8）無表情
9）栄養障害・飢餓	9）いやがらせ	9）無気力
10)けいれん・てんかん	10)集団不適応	10)頑固
11)下痢・嘔吐・消化不良	11)火遊び・放火	11)気分易変
12)循環障害	12)だらしなさ	12)おちつきがない
13)凍傷	13)いじめ	13)人との距離がない
14)歯牙欠落・舌損傷	14)器物破損・暴力	14)大人の顔色をうかがう
	15)性的逸脱行動	15)転換・解離現象
	16)自殺企図	16)パニック
		17)心因性疼痛
		18)チック
		19)不定愁訴
		20)希死念慮

出所：田中康雄「発達障害と児童虐待（Maltreatment）」『子どもの虐待とネグレクト』第7巻第3号、2005年、306頁。

周知のように自閉症では対人的相互反応における質的な障害、コミュニケーションの質的障害、反復的で情動的な行動様式が特徴である。また、ADHDやLDの子どもは他者との関係を求めてはいるが、対人関係や集団活動の維持の困難性が指摘されており、対人関係においては全ての障害において問題が生じることが示唆されている[28]。

さらに周囲からの理解が得にくいため、子どもの言動が非難や叱責の対象になる可能性が高く、自己評価・自尊心が低くなり、二次障害に陥りやすいことも指摘されている。

(3) 児童虐待

周知のように、親などからの虐待は、子どもの成長・発達に様々な否定的影響を与える。詳細な影響については、**表1**に譲るが、身体的発達影響、知的発達への影響、PTSD、対人関係上の問題、感情・感覚の調整障害、などが指摘されている[29]。

児童虐待の原因として、柏女[30]は、①親の生育歴を含めた親自身の問題、②夫婦関係や家族の病気、単身不妊などのストレスに満ちた家庭状況、③近隣や親族を含めた社会からの孤立状況、④よく泣く、なだめにくい、その他いわゆる手のかかる子、育てにくい子など子どもの要因、⑤いわゆる母子分離体験、相性の悪さといった親と子どもとの関係をめぐる状況というように子どもを取り巻くミクロからマクロまでの環境との関係を挙げている。

(4) 不適切な養育－生活のリズムの乱れ

現代の家庭では基本的生活習慣そのものが崩れてきていることも懸念される。例えば、P&Gパンパース赤ちゃん研究所の調査では、乳幼児の生活が大人の生活に合わせて夜型化している状況が見えてきた[31]。0～4歳の子を持つ母親の521人に「子どもを夜9時以降に連れ出したことがあるか」と質問したところ、26%が「ある」と答えた。外出先は多い順に、コンビニエンスストア、スーパーマーケット、レンタルビデオ店、なかには、居酒屋やゲームセンターという回答もあった。

このことはほんの一例に過ぎないが、親が子どもと一緒に夜更かしをして睡眠不足のまま幼稚園や保育所に登園したり、中には眠ったまま親に抱かれて登園する子どもが増加している。そのため、朝食をとらない子どもも増え、結果として、生活リズムの乱れとなり、元気がない、ぼんやりしている、機嫌が悪い、感情のコントロールができない状態になることが考えられる[32]。

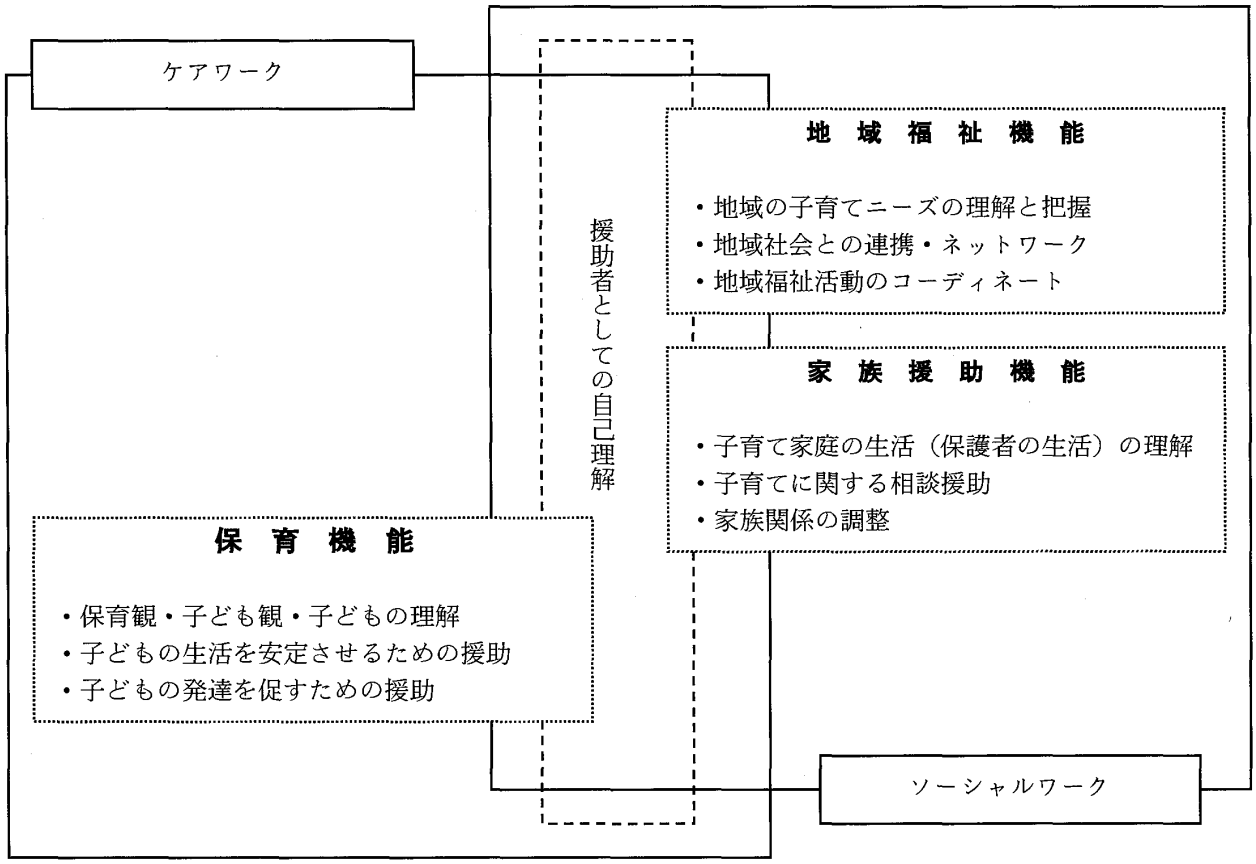
(5) 小　括

柏女は、前述した社会・地域・家族の変化に伴うなどの子どもへの影響を総称して、「子どもたちが主体的に遊び、自らの可能性を開花させ、生きる力の基礎を育成することのできる「三間」の縮小化」[33]と指摘する。三間とは、すなわち「仲間（人間関係）」「空間（居場所）」「時間（ゆとり）」である。これらの縮小は、いわば「生きること」「生活すること」そのものへ悪影響を与えたといえるだろう。

そして、これらの変化は、子どもの身体への影響だけではなく、親子関係、親同士の関係、子ども同士の関係、地域住民同士の関係などの人間関係の希薄化、そしてそれに伴って、子どもの社会性を育む機会を奪い、うまく対人関係が結べないという関係性の問題へと集約されたといっても過言ではない。

6. 人間関係を育む場としての保育所

このような状況において、多くの子どもが家族を離れて初めての集団生活を送る幼稚園や保育所の役割は極めて重要になってきている。子どもたちが保育所や幼稚園の中で集団で生活する上で最も重要なメリットの1つは、



出所：田辺敦子・金子恵美「ソーシャルワークの観点から見た保育カリキュラムの構造と課題」（『保母養成研究』第14号）の図2を筆者が加筆修正した。

図4　保育所機能の構造

前述したように他の子どもとの相互作用を通して成長・発達していくことにある。それが可能となるように、これらの場所が子どもの健全な成長・発達にとって機能的な環境となる必要がある。

そのために、まず第1に子どもの育ちをミクロからマクロの環境の相互作用から捉え、援助を行う必要がある。保育における環境（保育環境）とは何かについては、様々な議論があるが、保育所保育指針においては「保育の環境には、保育士や子どもなどの人的環境、施設や遊具などの物的環境、さらには、自然や社会の事象などがある」と分類されている。この環境の分類は、主として子どもが直接接する環境を指しているが、これまでの議論を踏まえて、待井による「就学前の乳幼児の育ちに関わる外的影響の総体」[34]という定義を援用する。

もちろん、実際の保育では、保育所保育指針の分類のような保育所における仲間関係や保育士との関係、家庭での親子関係といったマイクロ・システムが中心になるが、子どもたち一人ひとりを共感的に理解しながら保育を行うためには、個々に異なる環境を多様なシステムから捉え、その関連性について考えることは重要である[35]。この視点から保育所には、図4のように保育に加え、子育て支援の必要性が導かれるのである。

そして第2に、保育にあたっては「保育者が子どもとの信頼関係を築きながら豊かな環境を創造することによって子どもの主体性・自主性を引き出していく保育（ここでいう環境とは単なる物ではなく、子ども自身が好奇心や意欲をもって能動的にかかわろうとする

『もの』や『ひと』や事象や生活である)」[36]、すなわち「環境による保育」を意識する必要がある。そして、社会性発達を育てるにあたっては、特に人的環境との相互作用が重要となる。

子どもにとって保育士も環境の一部であるが、保育士は環境を創造し、それを支える者である。その最も根幹的な部分は、保育士が子どもに愛情をもって接し、子どもに共感し、寄り添い、信頼関係を構築することである。そうすることで子どもは保育士を基点にして、その環境の中を探索していくのである。さらに、保育士との関係が安定し、信頼関係が結ばれることで、不安定な親子関係が好転する場合も多い。

また、前述したように、他児とのかかわりが重要になってくる。社会性の発達を考えるならば、人的環境としての他児の役割は極めて大きく、子どもの発達に伴ってその比重は大きくなってくる。その基本が幼児期に形成されるのである。保育所では同じくらいの年齢の子どもたちと接する中で自分中心ではなく、折り合いをつけながら、同輩と付き合う態度や技能を獲得していく必要がある。特に子どもの遊びが社会性発達に与える影響は大きく[37]、このようなプロセスを保育士は意識して援助していく必要がある。

このように人間関係、対人関係を育むことを意識した取り組みが求められる。

注および引用文献

(1) 瀧井宏臣『子どもたちのライフハザード』岩波書店、2003年。

(2) 正木健雄『データが語る子どものからだと心の危機』芽ばえ社、2002年。

(3) 前橋明『いま、子どもの心とからだが危ない』大学教育出版、2004年。

(4) 正木健雄「『新しい荒れ』をどう見るか」村山士郎（編）『荒れる学校、キレる子ども』桐書房、1997年。

(5) 矢藤優子「気になる子どもの行動とその背景（第6章第3節）」大日向雅美・荘厳舜哉（編）『<実践・子育て講座>③子育ての環境学>大修館書店、2005年。

(6) 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子「保育所における『気になる』子どもの行動的特徴と保育者の対応に関する調査研究」『発達障害研究』第25号第1号、2003年。

(7) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫「保育所・園における『気になる・困っている行動』を示す子どもに関する研究－障害群から見た当該児の実態と保育者の対応および受けている支援から－」『発達障害研究』第26巻第4号、2005年。

(8) 遠藤利彦「子どもに育てたい社会性とは何か」『児童心理』第58巻第2号、2004年。

(9) 同上論文、2頁。

(10) 同上論文。

(11) 繁多進「社会性の発達とは」繁多進・青柳肇・田島信元・矢澤圭介（編）『社会性の発達心理学』1991年、11頁。

(12) 同上論文。

(13) 同上論文。

(14) 松永あけみ「子どもの社会性はどう発達するか」『児童心理』第58巻第2号、2004年、11頁。

(15) 同上論文。

(16) 佐藤一子「いま学校で社会性は育てられるか－地域社会・家庭とのかかわりの中で－」『児童心理』第58巻第2号、2004年。

(17) Bronfenbrennner,U., *The Ecology of Human Development : Experiments by Nature and Design*, Harvard University Press,1979.＝磯貝芳郎・福富譲（訳）『人間発達の生態学－発達心理学への挑戦－』川島書店、1996年。

(18) 岡本依子・菅野幸恵・塚田 - 城みちる『エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学－関係のなかでそだつ子どもたち－』新曜社、2004年、19～20頁。

(19) Bronfenbrennner,U., 'Ecological Models of Human Development', In Husen,T. & Postlethwaite,T.N. (eds.), The *International Encyclopedia of Education (2nd ed.)*, Pergamon Press , 1994.

(20) Bronfenbrennner,U. & Morris,P.A., 'The Ecology of Development Processes', In Domon,W. (eds.), *Handbook of Child Psychology : Vol.1 Theoretical Models of*

Human Development (5th ed.) , John Wiley & Sons , Inc. , 1995.
(21) Cater,B. & McGoldrick,M., *The Expanded family Life Cycle (6th ed.)* , CA : Thompson Books / Cole,1999.
(22) Mussen,P.H., *Child Development and Personarity* , Longman Higher Education , 1990.
(23) 柏女霊峰『次世代育成支援と保育－子育ち・子育ての応援団になろう－』全国社会福祉協議会、2005年。
(24) 矢藤優子、前掲論文。
(25) 楠凡之『気になる子ども　気になる保護者－理解と援助のために－』かもがわ出版、2005年。
(26) 藤原義博（監修）、平澤紀子・山根正夫・北九州市保育士会（編）『保育士のための気になる行動から読み解く子ども支援ガイド』学苑社、2005年。
(27) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫、前掲論文。
(28) 村井憲男・村上由則・足立智明（編）『気になる子どもの保育と育児』福村出版、2001年。
(29)西澤哲「子ども虐待がそだちにもたらすもの」『そだちの科学』第2号、2004年。
(30)柏女霊峰『子育て支援と保育者の役割』フレーベル館、2002年、25頁。
(31) 読売新聞（東京）　朝刊　2005年3月9日
(32) 矢藤優子、前掲論文。
(33) 柏女霊峰、前掲書、20頁。
(34)待井和江「保育における環境作りの課題」『保育の友』第47巻第13号、1999年、56頁。
(35) 星順子「保育環境論」佐伯一弥ら『保育学入門』建帛社、2003年。
(36) 齋藤政子「環境による保育」宍戸武夫・金田利子・茂木俊彦（監修）、保育小事典編集委員会（編）『保育小事典』大月書店、2006年、57頁。
(37) 杉浦佳世・石原金由・三宅進「子どもの遊びが社会性の発達に及ぼす影響」『児童臨床研究所年報（ノートルダム清心女子大学）』第11集、1998年。

参考文献

(1) 今井和子・神長美津子『「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ』フレーベル館、2003年。
(2) 一松麻実子『人と関わる力を伸ばす－社会性が幼い子への援助法－』すずき出版、2002年。
(3) 神山潤『「夜ふかし」の脳科学－子どもの心と体を壊すもの－』中央公論新社、2005年。
(4) 金子恵美「子ども虐待その他特別な配慮を必要とする子どもや家族に対する援助」柏女霊峰・山縣文治（編）『家族援助論（保育・看護・福祉プリマーズ④）』ミネルヴァ書房、2002年。